

支店長の わがまち紹介 第92回



流山おおたかの森駅南口都市広場で開催された「森のナイトカフェ」の噴水ショー

流山市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆様との密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。

今回は千葉県流山市です。松戸支店長が流山市長 井崎義治氏にお話を伺いました。

流山市は第50回(2017年9月)の本コーナーで紹介させていただきました。改めまして、流山市の魅力や特徴、展望についてお聞かせください

(取材日:2020年12月9日)

■ 子どもが増え続けるまち

少子高齢化が進むわが国では、ほとんどのまちで子どもの数が減少しています。しかし、流山市では、逆に増加し続けています。私は市長に就任以降、子どもの数が増加し続けることがまちの発展につながると考え、働きながら子育てができる環境づくりに取り組んでまいりました。

まず、保育園(保育所を含む。以下、保育園)の増設に努めました。市内の保育園数は既にコンビニエンスストアの数を上回り、2021年4月に開園する数を含めると、90カ所以上に達します。

しかし、それでも希望する保育園に入れない場合もあります。遠い保育園を紹介されても送迎できなければ保護者は働くことができません。そこで、通勤途中で指定の場所に子どもを預け、そこからバスで市内の指定保育園に安心・安全に通園



流山市長 井崎 義治氏



松戸支店長 湯浅 敏弘

できる「送迎保育ステーション」を運営しています。子どもが自分で荷物を持って歩ければ利用するため、概ね1歳半か2歳くらいから利用することができます。

また、2016年5月、子育て中の市民が、市内の空き店舗を利用してシェアサテライトオフィス「Trist」を立ち上げました。Tristは、女性が出産や子育てを理由に離職せずにすむよう、趣旨に賛同する都内企業などにサテライトオフィスとして利用してもらうほか、企業と個人双方に対するテレワークのための教育プログラムの実践やテレワークで働きたい人と企業をつなぐ採用支援なども行っています。

本市はこの取り組みを高く評価し、条例内容を変更して住宅改装にも補助金を支給するとともに、3年間の家賃補助も実施しました。現在は2号店も立ち上がり、国内大手美容総合サイトの運営企業をはじめ、多くの企業が利用するほか、海外からの受注も増えています。



送迎保育ステーションのバスで通園する子ども達

そのほか現在、「学童クラブ児童の路線バス帰宅」を試行中です。これは、支援員が学童クラブの最寄バス停から子どもを路線バスに乗車させ、保護者は下車するバス停へ迎えに行くという取り組みです。

現在は、路線を限定して行っていますが、この取り組みが定着すれば、仕事から帰った保護者が、自宅から離れた学童クラブまで子どもを迎えに行く負担が軽減されと考えています。

さらに、学童クラブを利用していないため、夏休みに保護者が仕事で不在になると、1人きりになってしまう低学年の子ども達のために、「子どもの居場所づくり事業」を実施しています。1日当たり1,000円(昼食・水筒は持参)という低予算で、子ども達は教職員OBなどのスタッフに見守られながら遊びや宿題をして過ごせるだけでなく、サイエンス講座や体育館での運動、近隣の史跡見学など充実したプログラムを受けることができます。

こうした取り組みの結果、子育てしながら市内外で働く母親が増加しました。しかし、これまで高齢化率が高かった住宅地で世代交代が進み、保育園が不足しつつあります。また、合計特殊出生率も上昇し、各小学校で行った調査では、「3人兄弟」の合計人数が「1人っ子」の人数よりも5倍近くも多い結果となりました。

そのため、2020年4月現在、本市の待機児童は26人となっています。26人と聞くと、とても多いと感じるのではないのでしょうか。しかし、国基準では、希望とは違う保育園を紹介されて

断った場合などは「待機児童」に含まれません。そのため、「0人」と公表していながら、実際には「隠れ待機児童」が100~200人存在するまちも少なくありません。本市は国基準ではなく、実際の待機児童数を公表しています。

本市では、保育園や高齢者施設、病院だけでも、毎年約1,500人もの従業員が増加しています。また、東京へ通勤する方達の流入も多く、新型コロナウイルス感染症の影響で緊急事態宣言が出た4月以前は、約6万人が東京へ通勤していました。さらに、市内に東洋最大級の物流センターが現在建設中であるほか、同センター内の事務所スペースに本社の移転を予定する企業もあるなど、今後も子育て世代の流入が予想されています。

■ 選ばれ続けるまちであるために

以前テレビで本市と他のまちの定住に対する誘致策が取り上げられました。その時に感じたことは、本市と他のまちでは誘致対策の視点が違うということです。

通常、他のまちは近隣市町村へ向けたPRを行っています。しかし、本市は近隣市町村へのPRは行いません。なぜなら、ハフモデルに基づき、近隣からは特にPRせずとも流入してくるからです。そのため、首都圏全体やより遠くへ向けたPRを行っています。

近年は海外勤務を終え、日本に帰国する際に本市に移住する方達も増加しています。本市には、4カ国語で授業を行う学校があるため、多くの帰国子女が入学し、入学を契機に転入されてこられます。

本市が転入者に対して10年ほど前から行っている調査では、当初、流山市を第一候補に選んで移住してきた方達は4割ほどでした。しかし、直近の調査では約7割にまで増加しています。

また、直近の「まちづくり達成度アンケート」でも、「流山市にこれからも住みたい」が8割を超えるなど、本市の住環境や都市環境への評価が高まっています。

アンケートの結果が示す通り、人口が減少する時代を迎えた現在、市民が望むのは、「安かろう、悪かろう」の環境ではなく、「防災上安心な上に、住みやすく、便利で、環境がよい」などの生活の質です。その質を高めるためにも、今後も良質な住環境と快適な都市環境づくりに注力してまいります。

■ 市民力の高いまち

本市は市民の意識が高いまちです。自分達でできることは積極的に取り組まれます。Tristはまさにその良い例です。

「母になるなら、流山市。」のキャッチコピーが有名となったためか、主体的な市民活動は、これまでは女性が中心になって行われるものが多かったように感じます。しかし、最近では、育児経験者が講師となり、「パパになる方達向けの育休の取り方」講座なども開かれるようになりました。

本市で市民活動を行い、有名になった方達は、全国各地から講演依頼や事業推進にお声がかかります。本市での経験を活かし、別のまちで、地域興しなどをリードされることは、素晴らしいことであり、誇らしく感じています。これからも流山市は、市民の活動を支援し、応援し続ける存在でありたいと思います。

■ 流山市は一部上場ではなく、ベンチャー

様々なことが目まぐるしく変わっていく現在、10カ年計画は時代に合わなくなっています。そのため、本市では数値目標を3カ年計画程度に留め、長期的な計画は方向性だけを示した抽象的なものにしています。計画というものは、臨機応変に対応できるものでないといけません。

こうした考えから、増設が求められている小学校と中学校については、子どもの数の変化に応じて小中学校が同じ建物を利用できるようにするほか、子どもの数がピークアウトする15~20年先には、保健センターや図書館、交流施設などとして再利用できるよう校舎を小分けするなど、工夫を凝らした内容で建設中です。

しかし、おおたかの森小学校は想定以上に子どもの数が上振れし、教室数が不足し始める状況です。本来、子どもの数の増加は大変喜ばしいことです。しかし、南流山小学校も2024年には2,000人を超えると予想され、早急な対応が必要です。

そこで、2021年4月に大畔地区におおぐろの森小学校を開校、通学区間を調整し、おおたかの森小学校から一部をおおぐろの森小学校へと移す予定であるほか、2022年4月にはおおぐろの森中学校を開校予定です。また、南流山地区では、2024年4月に南流山中学校を東洋学園大学旧校舎へ移転させ、これまで中学校として使用していた校舎を(仮称)南流山第2小学校とします。この他、市野谷地区にも小学校の開校を2024年4月に予定しています。

わが国のまちの運営権は、自治体だけのものではありません。しかし、私は、国が「破綻しても保証しない」ことを前提に、各自治体に運営を一任すれば、破綻するまちはないのではないかと考えています。少なくとも、本市は常に自分たちでよりよいまちにしようと考え、何歩も先を見ながら率先して、あるいは臨機応変に行動しています。そういう意味では、「流山市」は一部上場ではなく、ベンチャー企業のようなまちかもしれません。

■ 住み続ける価値の高い、小さくても有名なまち

2019年4月にオープンしたスターツおおたかの森ホールは、国内最高峰の音響設備が備わった素晴らしい施設です。新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着けば、国際室内楽音楽祭を開催したいと考えています。

既に市内のつくばエクスプレス沿線では、緑が与える都市の「うるおい」や市民の「やすらぎ」、人と人が集う「ふれあい」に満ちた「都心から一番近い森のまち」としてブランド化が進んでいます。例えば、小さなアパート住まいでも「いいところに住んでるね」と、うらやましがられることもあるようです。さらに2021年春、流山おおたかの森駅南口都市広場に新たな空間がお披露目されます。ぜひ、一度訪れ、緑陰の中、ゆったりとした賑わいと、おしゃれで楽しい時間を過ごしていただきたいと思います。

本市は2018年に、「世界の成長する4都市」の1つとして、米州開発銀行(IDB)から取材を受けたことがあります。2019年は海外のマスコミからも4回の取材を受けました。しかし、私はこの現状に満足せず、常に選ばれ続けるまちであるために、「住み続ける価値」を高め、世界標準、あるいは国際基準に則ってさまざまなことを率先して行い、「小さくても世界的に有名なまち」にしたいと考えています。

■ 筑波銀行に期待することをお聞かせください

キャッシュレス化が進み、新型コロナウイルス感染症の影響により経済的にも厳しい状況下では、理想を貫くことは難しいと思います。しかし、地域に根ざした地方銀行には、地方銀行にしかできない役割があると思います。

本市は電気も自然エネルギー由来のものに切り替え、市内で循環できるよう変えていきたいと考えていますが、それと同様に、お金も地域内で循環したいと考えていますので、ご協力をお願いします。

写真提供：流山市